



現代の文学=37

遠藤周作集



おバカさん
海と毒薬
白い人
その前日
札の辻
四十歳の男

河出書房新社

現代の文学37 遠藤周作集

周作

© 1966

責任編集

川端康成 丹羽文雄
田 地 文 子 井 上 靖
松 本 清 張 三島由紀夫

昭和41年5月1日 初版印刷
昭和41年5月8日 初版発行

定価 390円

著 者 遠 藤 周 作
発 行 者 河 出 朋 久
印 刷 者 高 橋 武 夫
装 幀 原弘 (N.D.C)

印 刷・大日本印刷株式会社
本文用紙・本州製紙株式会社
函 貼・神崎製紙(ミラーコート)
同 納 入・東 邦 紙 業 株 式 有 限 公 司
ク ロ ス・日本クロス工業株式会社
同 納 入・株式会社小島洋紙店

発 行 所 東京都千代田区 株式 河出書房新社
神田小川町三の六 会社

電話東京 (292) 大代表 3711
振替口座 東 京 10802

製本・小高製本工業K・K

落丁本・乱丁本はお取替えいたします

遠藤周作集

お
バ
カ
さ
ん

ナポレオンの子孫

梅一輪、一輪ほどのあたたかさが終つて——庭のモクレンのつぼみが白くふくらんだ三月下旬の日曜日……

カメの子のように手足をすくめ、ホカホカとした寢床のぬくもりをたのしんでいた隆盛の耳に、

「よく、カビがはえないこと……十時なのよッ」

階段の下から妹の巴絵の、キンキンとした声が響いてくる。

「起きるよ」

ひどく情けなそうな声をだして隆盛は蒲団を頭からかむった。

「三十分前もそうおっしゃったじゃないの」
「今ねえ、シャツを着とる……とこでです」

もちろん、これはうそである。うそではあるが従来の経験上、業をにやした妹が階段を駆けのぼり、毛布や蒲団を引きはがしにくるまでに、まだ余裕のあることを隆

盛は心得ていた。

日曜日の朝ごと、彼はきまつて巴絵から三度の波状攻撃をうける。第一回目は下の廊下からあのキンキン声がないにやらをわめく。なにやら、というのはその言葉がねぼけ耳にはよく聞きとれぬからである。

だがこの時はあいまいな声で「うむ」とか「ああ」とか返事しておけばよろしい。

二度目は威嚇のつもりか、今のように寢室にのぼる階段をトントントン足ぶみしながら怒鳴ってくるのだが、これもおびえる必要はあまりない。シャツを着ている最中だとも答えておく。

「うそじゃないわね。見にくいわよ」

「はい、ハイ」

「見にくいわよ。本当に」

相手もさるもの、そのまま立ち去ろうとはせず、ジツと耳をすまして二階の気配を偵察しているのがこちらにはありありとわかった。

「きてみなさい」彼もひらきなおって、「今、一糸まともぬストリップですが、いいですか……」

「H！」

第二回目この警報がやつと解除されると、手足を思いきり伸ばす。まくら元の煙草を口にくわえる。これは休日朝だけに限られたサラリーマンのだいたい味であ

る。

大手町のF銀行に勤めている隆盛にとっては、日曜日こそは朝寝坊もゆっくり楽しみたいのだが、家にはいささか目の上のタンコブである妹がひかえている。

世間には恐妻という流行語があるが恐妹という言葉はない。まだ独身者の彼には未来の妻の怖しさはよくわからぬが、現実存在する妹の圧迫感は何少とも骨身にみている。

会社の昼休みなどストーブをかこんで既に結婚している同僚や先輩がコワそうに細君にたいする恐怖をうちあけるのを耳にする時、隆盛はどこまで本当かいな、と思うのである。極端に言えば恐妻、恐妻と叫ぶのは、ああいう言葉によって女房を懐柔する亭主族の老かいな政策ではあるまいか……第一、コワイと言ったってどんな細君にも最後は夫を許そうとする弱さが心の底にあるではないか。

そこにいくと妹という女族はちがう。

隆盛の経験から言うと、妹は子供の時から兄貴という男性にたいする、監視人であり、批判者である。特に生意気さかりの十四、五歳をすぎると、もうイケません。

彼女たちは兄貴のどんな小さなアラや失敗でも決して見のがさない。

「お父さまに言いつけるから」

中学生のころ隆盛が、予習をさぼって近所の悪友たちとこっそり遊びにいこうとする時、巴絵は黒い大きな目を光らせてこう威嚇した。屋根にのぼってはじめての喫煙の味をこっそり味わっていた時、だれよりも先にこの犯行をかぎつけたのも妹である。

腕力で脅かしても言うことをきかない。少女のころの巴絵は隆盛にひっぱたかれてもほとんど泣かなかった。

「お父さまに言いつけるから」

そして会社から帰宅した父に事のあらましを二倍、三倍に拡大して報告する。結局いつも損をするのは隆盛の方である。

そんな時、逆にすかしたり、きげんをとったりするとなお大変だ。女というものは子供の時から男にきげんをとられると、つけあがる癖がある。とに角、この妹はなまやさしく取扱えぬ存在なのである。

第一、名前がよろしくない。九州鹿児島出身で漢学者だった祖父が男の子は西郷ドンのような大人物になるべしと、はじめての孫に隆盛という名をつけた。名は体をあらわさずで、隆盛の場合は一向に豪放磊落な大人物の面影はないが、巴絵の方はあの木曾義仲にしたがった巴御前のように、勝気で、負けずぎらいで、チャッカリで、つまり当世風の近代娘に育ってしまったのである。

兄の目から見ても巴絵は十人並以上の顔だちと思う。あれでも怒ったり、ツンとしたりしなければ可愛いところもあるのだが、いわゆる星を見ては涙ぐみ、スマレをながめてはため息をつくような乙女らしさを妹の性格から発見するのはまず困難である。もっとも小さいころはああではなかった。小さいころは巴絵だって紅葉のように可愛い手をひろげ、

「お兄ちゃま」

六つ年上の隆盛のあとを慕ってヨチヨチ歩いたことだつてあるのだ。

それがいつの間にか——この兄貴を軽蔑するようなケシからぬ娘になつてしまつたのである。

「ああ——世の男性ってみんなお兄さまみたいなグウタラなのかしら。あたし結婚なんか絶対にしないわ」

そんな生意気なことまで言うのだ。

もっともそう言われても近ごろの隆盛は黙っているより仕方がない。早い話がチャッカリした巴絵は生活力において彼を凌駕（りやうが）しているのである。目白の女子大の時から目さきのきく巴絵はあまり人の勉強しないイタリア語とそのタイプと速記とを必死で勉強していた。英語や仏語を学ぶ女の子は当世ではホオキではき捨てるほど多いが、イタリア語となるとそうザラにはいない。これが巴絵のねらいだったわけだ。

作戦はみごとに当って、女子大を卒業するとイタリア人の貿易会社から、女の子には思いがけぬ二万円の給料で採用された。もっとも外人会社の常でボーナスこそないが、一サラリーマンの隆盛の給料などより、はるかに上まわっている。

経済力一つとっても、どうも妹には頭があらない。

3Kという言葉がある。いずれも近ごろの若い娘がもちたいと思つてゐる物の名前だ。一に恋人、二に車、そして第三は当世流行の株だそうな……

ところが現実家で、非星重派の巴絵はこの3Kのうち、第一の恋人、つまり男性にはまだそれほど興味がないらしい。男という者が、兄の隆盛のように頼りない夢想家であるならば、当分は結婚など致しません——そう宣言するほどの娘だから、会社の男社員も、家に遊びにくる隆盛の友だちも頭からナメてかかっている。もちろん巴絵とて心のうちでは自分をぐんぐんひきずってくれる強い、たくましい男性がいつかはあらわれるのを、ひそかに待っているのかもしれないが、少なくともそうした内心の秘密を兄貴などにもらすようなセンチな真似はしない。

車となるとドライ派の巴絵にはまんざらでもなさそうだが、いま、それくらいのお金があるならば、これをウ

ンと動かして二倍にも三倍にもふやしてから、と計画しているようである。

結局、現在、彼女が目をつけているのは3Kのうち、最後の株。一昔前の女性たちはせいぜい、赤いダルマの貯金箱か郵便貯金の通帳ぐらいしか知らなかったが、近ごろの若い娘は株のスリルに心ひかれていた。あのマネー・ビルとかに興味をおぼえはじめていた。

毎朝、隆盛と会社に出かける朝食の食卓で、はしを動かしながらこの巴絵がサツと目を走らす新聞のページは、三面記事でも映画欄でもない。ましてこの「おバカさん」というような小説でもない。もっとも実用的なる証券欄である。

そんな妹の姿を見るにつけ――

(だいぶん、ためてやがるんだろうナア……)

あさましくも、哀しくも、隆盛は羨望と慨嘆の入りまじった複雑な気持ちにならざるをえない。

(こいつ、一体、どんな男と結婚するんだろうか)しみじみ、そう思う。(全く亭主になるやつ顔がみてえよ)

――女子と小人は養い難し――

――燕雀、安んぞ鴻鵠の志を知らんや――

有難いことに古人の作ったことわざというものは男尊女卑の精神に富んでいるから、巴絵に頭の上らぬ時、隆

盛はつとめて、昔おぼえた名言を思いだす。思いだしてはわずかに溜飲を下げることにしている。だが如何せん、現実にはこの鴻鵠(大きな鳥)は燕雀(こすずめ)に借金を申込む場合もしばしばあるので、どうも具合がよろしくない。

「血肉をわけた間から……一口よろしくたのみます」

某政黨副総裁のような論理まで使って、六つ年下の妹に頭を下げるのだが、

「義理人情はごめんよ」びしゃりとやられる。

「この間も千円、貸したばかりじゃないの」

「それがその……行くも帰るも別れては、知るも知らぬも逢坂の関……」

「だめッ。お兄さまには貸せません」

「貸さざれば、貸すまで、待とう、ほとどぎす」

こんな押問答の末、巴絵が兄の哀願に応じるとして、それは必ずしも美しい兄妹愛のためばかりではない。

「いいこと、今度から一週間について利子を一割にしますから」

「そりゃ、ムゴい」

「ムゴいこと、あるもんですか。なんなら別口にお頼みあそばせ」

兄に貸す金に利子までつける以上――

「もう少し、女らしくなったらどうだ」

隆盛も時々、口惜しまぎれに説教してみることがある。「それではお嫁にもらい手もあるまいぜ」

「オヤ……お兄さま。私の選ぶ方をみて頂きたいわ」

「黙って聞きなさい。たとえばだよ……」

「道」というイタリア映画があった。巴絵もたしか見たはずである。隆盛はあれほど妹にとって良き教育映画はないと思っている。

ザンバーノという男に、ぶたれてもけられても、いじめられてもみつがされても、そんな男のあとをトボトボとついていくジェルソミーナとよぶ女。そして最後には冬のわびしい夕日の照る山のなかで男から捨てられて……

人生に対してはチャッカリした身がまえも、損得づくの計算もない女。今の娘から見ればかかもしれないが、このせつない心がジェルソミーナをいつのまにか、美しい聖女にたかめていったではないか。女が男よりすぐれた心情の持主ならば、それはジェルソミーナのような場合においてである……

かように一席ぶったあと、隆盛は感動した妹が、もしや涙ぐみでもするのではないかと、

「いいかね」ことさら、莊重な調子で、「人生には損す

ることも必要だよ。むだも大事。巴絵にはそれが無い」

それからソツと相手の顔をうかがうと、これはどうしたことであるう、巴絵はおかしそうにケラケラと笑いはじめただけである。

「要するに唐人の寝言ね。時代遅れよ。男に都合がいいだけ、そんな考え」

「なぜだね。ジェルソミーナでわからなければ、山内一豊の妻の話でも……」

「もう沢山」

上につんと向いて、ひきしまった小鼻にビクビクと勝利感を漂わせて、もう、てんでジェルソミーナの女性観を一笑に付している。

この上向きの巴絵の鼻がよろしくない——そう隆盛は思う。彼女自身はあのソフィヤ・ローレンとかいう女優の鼻に似ていると内心、御自慢らしいが隆盛には気に入らない。少女のころにはここに小じわをよせて彼にアカンベーをした鼻である。娘になってからはさすがにそんなはしたない真似はしないが、男性や社会や人生に驕慢不遜な感情をこの上向きの鼻はいっぱいに示している。

(今にその鼻がへし折られるぞ)

キュツとつねってやりたくなる。だが隆盛につねられれば、二倍、三倍の強さでつねりかえすのが巴絵なのである。

こんな事情で……

日曜日の朝、みのむしのごとく蒲団にくるまった隆盛が妹のキンキンとした声に、なぜ空井戸の底からひびくような返事しか出せぬのである。

第二回目の警報が解除されて、彼がこっそりと朝の煙草を二本、喫い終った時、ふたたび、廊下でスリッパの音がパタ、パタ、パタと烈しくきこえてきた。

(それ、来襲……) 素早く煙草をもみ消す。まくら元の下着をつかむ。

だが、どうしたのであろうか。巴絵はふしぎに大声をあげず、

「お兄さま」しずかに階段をのぼってきたのである。

隆盛はあわててシャツに首を入れたが間に合わなかった。

朝日のいっばいあたった障子をサッとあけて――

真白なセーターを着た巴絵は腕を胸に組んだまま、キツイ目で見おろしている。

「イヤ……清宮様、御婚約、おめでとう」

つじつまの合わぬことを口走りながら、隆盛は下着のボタンをはめようとしたが、奇怪にも胸もとのボタンがないのである。

「うしろ前よ」

皮肉な笑をほおにうかべて巴絵は兄の一挙一動をジッ

と観察していた。

「えっ」

「うしろ前にシャツを着てるじゃないの。ボタンがないの……当り前だわ」

「わかつとる」

バツが悪いから、隆盛は視線をそらして窓の外に顔をむけた。

「お兄さま……」

「なんだ」

「清宮も御婚約だけど、お兄さまも御婚約?……」

寢床の上にあぐらをかいて、隆盛は横目で妹をうかがった。黒い大きな目にも、例の上向きの驕慢な小鼻にもビクビクと人を小ばかにしたような気配がただよっている。

「保名春子さんって、どなた」

「春子……知らんなあ」

「本当かしら」

疑いぶかい女である。唇を少しゆがめて、じっと隆盛の表情を見つめている。

實際の話、そう見つめられても隆盛には保名春子などという名前は全く記憶がない。ガール・フレンドとはまことの女友達を呼ぶのか恋人をさすのか、近ごろ、判然としない世の中だが、今日のような日曜日、電話をかけ

てくれる女友達一人さえいない隆盛である。

「おれがその……春子さんとやらと、どうか、したと言
うのかね」

「さあ……そりゃ、どうだか存じませんけど」巴絵はニ
ヤツと笑つて、

「たつた今、シンガポールの春子さんから分厚いお手紙
がきたわよ」

「シンガポール？」

隆盛はボカンと口をあけた。春さきの陽気で妹の頭が
少し——手をつけた株が暴落して——おかしくなったの
ではないかと思つたほどである。もとより、シンガポー
ルには一度も行ったことはなし、ましてそんな遠い町の
女性など、夢の中でも交際したおぼえもない。

「おい、その手紙、見せてみろ」

「ただであげられるもんですか。先月の貸金と引きかえ
てよ」

「冗談じゃない。本当に知らないんだから……」

さすがに巴絵も隆盛の表情がまんざらうそではないと
わかつたらしい。それでもまだ疑いっぽい目でこちらを
ジロジロと見ていたが——

真白なセーターの中に手を入れて一通の封筒をとりだ
した。

たしかにシンガポールから発送した手紙である。上書

きにはタイプで打ったローマ字だが、これもTAKAM
ORI HIGAKIと書いてある。

裏をかえすと……

保名春子（瓦斯トン）

何が何だか、隆盛にはさっぱり、わからない。

「ひでエ字だなあ……」

裏をかえして、隆盛は思わず愕然とした。全く、ひで
い字である。いやしくも女性と名のつく人の水茎の跡う
るわしい手紙ならばたとえ間違つて舞いこんできたにせ
よ、胸もときめこうが——

この保名春子なる金クギ流ともミミズ流ともつかぬ書
体。色気も味もない悪筆は一体どうしたことか。小学生
の鼻たれでさえ、かくも下手くそな文字はまず書けない
と思われる。……

「だれかの悪戯かね。いや悪戯にしては四月一日まで、
まだ、二、三日はあるし……」

「とも角、開くことよ。内容を読むことよ」

「うむ」

そう、巴絵にせつかれて、思わず封筒の口を破りかけ
たが、

（待てよ……）

疑惑が一瞬、心をかすめた。というのは——つい先だ
つて読んだ推理小説のすじ書がヒョイと胸に浮んだから

である。あれは一人の女が大コロのように自分を捨てた男に復讐する話だった。彼女は封筒の口に、マレー半島でとれるアセホソリンという劇薬をぬりつける。開封する男の指にその毒がしみこむのをねらったのだ。

「巴絵……シンガポールはマレー半島だったね」

「当り前じゃないの」

「アセホソリンの毒薬……」隆盛は声をひそめた。「ねえ、君、開きなさい」

「アラ、なぜ……」

「なぜって要するに……おれ、この春子さんなんて女性には本当に知らないんだからね。さっきから根も葉もない疑いをかけられて、迷惑だよ」隆盛はひらきなおった。

「開いてもらいましょう。ハッキリ目の前で開いてもらいましょう」

「切られ与三みたいなおとしやるじゃないの」

上向きの鼻で巴絵はフンと笑った。フンと笑ったが好奇心という女性特有の心理が、やっぱり真白なセーターに包んだ胸のなかでうずきはじめたらしい。

「本当に開いていいの」念を押しながら桃色のマニキュアをつけた指をへびのようにソロソロッと動かして、

「じゃ、拝見するわ」

「声をだして読んでみる。こっちは潔白なんですから……全く近ごろの娘は猜疑心と嫉妬心が強いから困る」

隆盛は巴絵が封筒の口を丁寧に切り、中からレター・ペーパーを出すのをじっと見ていた。どうも、この様子では別に毒薬もしみこませてはいないらしい。四つに折りたたんだ便箋は航空使用のすき通った、うすい紙である。

「なんて書いてある？」隆盛とてこの手紙に興味がないわけではないから、妹の背中から首をさしだした。

カメの子が行列縦隊でぎっしり日なたぼっこをしているように幾列にも並んでいる。虫めがねで拡大しなければわからないほど細かく、小さく、ぎっしりと――

「読むわ」

「はい」

「ハイカベ……」

「えっ」

「ああ、これは拝啓のつもりだわ。啓という字を壁にしているの」

「なるほど」

「ハイカベ……やっとな股がみつかり……なに、これは」

巴絵は顔を真赤にして悲鳴のような声をあげた。

漢字が制限された結果か、それとも戦争中の粗雑な教育のためか、ちかごろの青年男女は誤字、脱字を平気で書くとか……

ある青年が先輩に送った手紙に、

「小生、似前として……」と書いた。

「君、こりゃ、依然として、の間違いじゃ、ないかね」

先輩にそう注意されると、彼、キョトンとして、

「でも先輩……イゼンとは前に似るの意じゃないですか。だから似前でしよう」

そう抗弁したという話である。

漢学者の祖父をもつ隆盛や巴絵も、若い世代には違いないから、漢字の方には至っておヨワい。そのおヨワイ彼等もさすがに保名春子なる女性の手紙をみて、おびただしい誤字、脱字に仰天してしまったのである。

誤字、脱字だけならよい。真意不明の表現にあれこれ首をひねる兄妹の努力は、古代の象形文字を判読した考古学者のそれに少しも劣らなかった。

「もう……読むのイヤ」

ハйкаベ、股をみつけれ——冒頭の一句からして、げに年ごろの娘が朗読するにたえない表現であろう。顔を赤らめた巴絵がキタないものにも触れたように手紙をボイと放りだしたのは無理はない。

「おい、かしてみる」

今度は好奇心にかられた隆盛がレター・ペーパーを拾いあげて、じっと考えこむ。

「アッ、ハッ、ハ、わかったよ」

「なにが？」

「股じゃない。暇をみつけれ、だ。こりゃみごとに間違えたもんだ」

「みごとなもんですか。ひどいわよ」

「ひどいからね」

真顔になって隆盛は寢床の上にあぐらをかいたまま、手紙に目をおとした。

静かな日曜日の午前である。隆盛たちの家は都心から大分はなれた世田谷・経堂の住宅地にあるが、この辺は春さきになると庭に小鳥がとんでくる。その小鳥の小さなさえずりが二階の窓のむこうから聞えて——

下の勝手口で女中のマーちゃんが御用聞きと何かを話しこんでいる声以外には、家の中にはカタリという物音もしない。

あかるい陽が隆盛の顔にあたっている。巴絵は手紙を読んでいる兄の表情がいつのまにか、ひどく真剣になってきたのに気がついた。

「どうしたの……」

すると隆盛は急に顔をあげて大声で叫んだ。

「こりゃあ、大変。フランスの青年が……ここにやってくるんだぜ」

「なんでですって？」

「イヤ、冗談じゃない。その上……その男はナポレオン」

皇帝の子孫なんだ」

屋根の小鳥がチ、チ、チッと鳴いてどこかに飛び去った。勝手口で御用聞きと話をしていた女中のマーちゃんの声もきこえなくなった。

「脅かすのはよしてよ」

「なに言ってるんだ。本当なんだ」

隆盛はあくまで真剣な顔つきだった。

「信じられないわよ」

「それどころじゃない。彼はもうシンガポールを発てるんだ。あと二十日もしたら横浜につくんだぜ」

「横浜に？……一体なんの話なの」

「それが……君もおぼえてるだろ。八年前、おれが外国のペン・フレンドと文通していたのを……」

確かにそういうことがあった。戦争が終ったあとで、隆盛はまだ学生だったが、殊勝にも語学の勉強と切手の交換と称して海の向うの外国少年たちと手紙をとりかわしていたのを巴絵もおぼえている。

「でもどうしたと言うのよ。かんじんの保名春子は……」

「保名春子じゃない……ここを見てくれ。ここを」

隆盛はレター・ペーパーを巴絵の目の前にさしだした。

なるほど、指さされた最後の行にはあの日なたに並んだカメの子のような悪筆が……

（僕ノ名ヲ日本字デ畫キマシタ。保名春子、瓦ストン）
畫キマシタは、畫キマシタの間違いであることは巴絵にはすぐわかったが、この瓦ストンというのは――

「ガストン・ボナバルト。家族の名がボナバルト。彼の名がガストン。この男、日本人はみんな女のように名前の最後で子をつけると錯覚したにちがいないんだ……」
隆盛は先ほどの恨みもあるのか、情けなそうにつぶやいた。

「パリの東洋語学校で二年間、日本語を勉強したと書いてあるがね。どうして日本に来る気になったんだろう。そう言えば八年前、おれと文通していたところから……日本づいて、いたがなあ……なんでも伯父さんが神戸にしばらくいて、帰国してから彼に日本熱を吹きこんだらしい」

「見物で来るの。商用で来るの」

「それが……何にも書いてないんで、おれにもわけがわからん」

それから隆盛は巴絵の顔を見てシンコクな顔をした。

「こりゃ、お嫁さん探しかもしれないぜ……いつか南米から大金持のお爺さんが日本人の花嫁探しにやって来たらうが。巴絵ガンバってみなさいよ」

「下劣なこと言わないで頂戴」

「でも、相手は英雄ナポレオンの子孫だぜ。あのころ、ボナパルトという彼の名をふしぎに思つて手紙でたずねたら……そうだと返事して来たような気がするから」

「ナポレオンが何よ。ファシストの元祖じゃないの」

「おい、どうしよう、この男を……」

「ともかく、母さまに相談するわ。見もしらぬ外人を家に泊めていいかどうか、お兄さまの一存だけじゃいきませんからねッ」

ナポレオンの子孫が日本にくる——。

それもほかならぬ隆盛と巴絵との家を頼つて……

これはたしかに春の日曜日、ささやかな一家庭に舞いこんできた青天霹靂のニュースにちがひなかった。

巴絵がダ、ダ、ダッと機関砲のような音をたてて階段をかけおると、着物をひっかけた隆盛が帯をひきずりながらそのあとを追う。

「母さん、一大事」

母の志津は庭に面した八畳で隆盛たちの父親が愛用していた黒檀の机にせっせとからぶきんをかけていたが、「なんです、ね、そうぞうしい」

図体だけは大いのに何時までたっても子供っぽい隆盛の顔を老眼鏡のうしろから見あげた。

医者で医大の教授だった亡夫、亮吉が死んでから六年になる。巴絵がまだ東洋英和の生徒で、隆盛がどうにかこうにか落第もせず大学を卒業できる直前に脳溢血で倒れたのだが……

爾来——

志津は昔と同じように自分の手で亡夫の書斎の本だのをぞうきんでふき、本のちりをはらい、黒檀の机をからぶきんでみがくことを毎日、欠かさない。これだけは巴絵にも女中のマーちゃんにもまかせないのである。

「それがそうぞうしいんじゃないんですよ。母さん」

「帯」

「え？」

「帯がとけてますよ」

母に注意されて隆盛は畳にひきずった帯を腰にぐるぐる巻きつけながら、

「今、巴絵に話したところですが……ほんとに大変なんスから。……」

シンガポールからきた航空便の一件を声はずませながら説明した。

「僕としてはですよ、母さん。昔のベン・フレンドだった僕を頼つて日本にきたんだから一家あげて歓迎すべきだと思ひんです。日本の家庭を知る。僕らと一緒にミソ汁を飲み、タクアンをたべる、それで結構だと思ひんで